

「生きる」意味の探究
- ニーチェ『悲劇の誕生』をめぐって -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
酒井 奈津季

「生きる」というのは、どういうことなのか。人間は一体何のために生きているのか。そして、個人は何のために生きているのか。これは、多くの人が一度は抱いたことがある疑問ではないだろうか。その疑問の解決のためには、様々な切り口があるだろう。例えば、「生物」や「宇宙」や「歴史」など、または「正義」や「道徳」や「倫理」などである。しかし、結局それらの中に答えを見いだせない人もいるだろう。なぜなら、それらは人間が作った概念だからである。そして、存在するもののうちの「人間」という枠組みの中の存在者が生きる意味に「人間」自身が作った概念をあてはめても成立しえないと考えられるからである。そこで私は、この疑問に答えるために、個人を包含している人間という視点を持つことが妥当であると考え。そこで、この疑問に答えるために、まず「人間」が生きている、あるいは存在している世界というのはどのようなものなのかを明確にし、その中で、人間が果たす役割を明確にすることが「人間は何のために生きているのだろうか」、ひいては「個人は何のために生きているのか」という疑問の答えになりうると考える。そこで、本論文ではニーチェの『悲劇の誕生』をもとに考え、書いていく。

そして、今回私が最終的に導いた結論は「自然に、あるがままであること」である。これは、行為を起こすということを意志することと、行為を起こさないということを意志するということの両方を含んでいる。

第一章では、『悲劇の誕生』について述べ、二柱の芸術神であるアポロとディオニュソスについて、またギリシア芸術の最盛期であるアッティカ悲劇と演劇的酒神賛歌（ディキュランボス）について触れた。そして、ニーチェの「ところで民族の価値は一人の人間にしてもそうだが自分の体験に永遠者の刻印を押す能力に応じて、ほかならぬこのことだけで、きまってくるのである。」という考え方、および、「生存と世界は美的現象としてのみ是認される」という命題に触れた。

第二章では根源的一者について触れた。「真に実在する根源的一者は、永遠に悩めるもの、矛盾に満ちたもの」である。また、私はここで、「逃げ」について私の考え方を述べた。

第三章では、「生存の是認」について『悲劇の誕生』に書かれているもの、また私が考えるものについて述べた。ニーチェは、「生存と世界は美的現象としてのみ是認される」と考えた。しかし、もし私たちが美学的領域をも包含した領域に立って考えるならば、私たちは仮象ではなく、根源的一者それ自体ではないだろうか。そして、その考え方から、私は「自然に、あるがままであること」という結論に到達した。